

奉祝神楽舞

大八洲の守護神を讃える

生國魂の舞

生國魂神社



明治天皇の御歌「産みなさぬものなしといふあらがねのつちはこの世の母にぞありける」(大地こそは偉大なる万物生成の母である)をもとに、昭和40(1965)年に宮内省の安倍季巖楽長が作曲。その後、子息の安倍季昌楽長により巫女舞として作舞されました。万物を生成する大地の働きは、大八洲(日本列島)の守護神である生國魂大神のおかげであり、その御神徳を讃えるため、毎年、重陽の節句(9月9日)に奉納されています。榊を持った巫女が、伶人(雅楽・神楽奏者)の演奏に合わせて優雅な舞を披露しました。

愛らしい幼子の仕草

紅わらべ

大阪天満宮



菅原道真公が5歳のときに詠まれた歌「美しや 紅の色なる 梅の花 あこが顔にも つけたくぞある」をもとに、梅を愛でる可愛い道真公を偲び、平成13(2001)年、元宮内庁式部職楽部の芝祐靖氏により作曲作舞された神楽舞。大阪天満宮をはじめ、各地の天満宮で天神様ゆかりの祭りの際に奉納されています。幼子の仕草を取り入れた可愛らしい舞振りが特徴。大阪天満宮神職の演奏に合わせて、同宮の神楽教室へ通う生徒が舞を披露しました。

奉祝和太鼓

国土生成の力強い響き

八十島太鼓

生國魂神社



日本国土の神霊(みたま)の生島大神、足島大神を祀る生國魂神社。八十島太鼓は、その御祭神の神威と神徳を讃えるものとして、平成24(2012)年に創作されました。同29(2017)年に八十島太鼓の会が発足。3年間の稽古を経て、令和2(2020)年に生國魂神社にて奉納演奏が行われました。舞台上から一般に披露されたのは、本シンポジウムが初めて。11人の出演者により、4つの部で構成された曲のダイジェストが披露されました。

先端技術を使った歴史や文化の紹介

目の前に字幕が出現

能「生國魂」

(公社)能楽協会/大日本印刷(株)



文化財や芸術作品のデジタルアーカイブ化に取り組む大日本印刷が、AR(拡張現実)技術\*を使って、能「生國魂」を解説。「みどころグラス」と名付けたメガネ型の装置をかけて観ると、八十島祭のストーリーや能楽の解説などが字幕になって現れ、舞台から目をそらさずに集中して能を楽しむことができました。  
\*スマホゲーム「ポケモンGO」のように、実在する風景にバーチャルの視覚情報を重ねて表示することで、目の前にある世界を仮想的に拡張する技術。  
(能「生國魂」の画像は能楽協会提供)

『八十島祭絵詞』第2巻

<住吉の浜に到着>

一行が住吉の浜に到着。当初は熊河尻(現在地不明)という場所を祭場としていましたが、後年、住吉の浜に変更されました。



# 4Kデジタル動画で 90年ぶりに全巻公開

えことば

## 『八十島祭絵詞』

『八十島祭絵詞』は、昭和天皇の即位礼(昭和3年11月10日・京都御所)を記念するとともに、「八十島祭」を後世に伝えるべく制作されました。全3巻・約54mにもおよぶ長大な絵巻物で、平安時代から鎌倉時代にかけて、天皇の即位儀礼の一環として行われた宮中祭祀「八十島祭」のようすが描かれています。豊國神社(大阪市中央区)社司の角正方氏の研究をもとに、書家の岡山高蔭氏が書、日本画家の津端道彦氏が絵を担当。大阪の各界の支援を受けて制作され、翌昭和4年に同社に奉納されました。

しかし、絵巻は長尺で展示が難しく、完成当初に一般公開されたものの、その後は長らく豊國神社に保管されていました。関西・大阪21世紀協会は、これをいつでもどこでも見られるようにするため、文化庁の助成を受けて『八十島祭絵詞』のデジタルデータ化を推進。2020年7月、凸版印刷株式会社が2日間かけて全巻を撮影し、それをつなぎ合わせた4Kデジタル動画を制作しました。

今回の改元記念シンポジウムでは、その全巻を公開するとともに、平安京から難波の津にいたる道中の、ゆかりの地を紹介する動画をご覧いただきました。大阪の歴史・文化を伝える新たなコンテンツとして、今後はインターネット配信やさまざまなイベントの機会に、多くの方々にご覧いただけるよう活用してまいります。

制作 関西・大阪21世紀協会  
監修 高島幸次氏(大阪大学招聘教授)  
編集 凸版印刷株式会社

古代の大阪は、東に河内湖を望み、中津川や三国川の河口にある大小の島々(八十島)を抱えた半島のような地形(上町台地)でした。ここで行われた「八十島祭」には、高位の女官・典侍(ないしのすけ)を中心に、都から派遣された大勢の人が参加。1160年の八十島祭では、平清盛の妻・時子が典侍を務め、貴族や警備の武士など数百人にもおよびました。『八十島祭絵詞』には、平安時代に行われたその道中のようすや、参加者の役割、人数などが記されています。

### 大阪湾

当初の祭場は熊河尻(現在地不明)でしたが、その後、住吉の浜(現在の住吉大社あたり)に移されました。



#### 1 平安京

平安時代の内裏は、今の京都御所とは異なる場所にありました。現在の二条城を含む千本通のあたりを中心に、広大な宮殿が広がっていました。



#### 2 淀の津

京都市伏見区納所町あたり。巨椋池という巨大な池に面し、一行はここから舟で摂津国・難波に向かいました。



#### 3 渡辺の津

大阪市北区天満橋八軒家浜あたり。淀川を舟で下ってきた一行は、ここから陸路(熊野街道)で住吉の浜へ向かいました。

### 『八十島祭絵詞』 第2巻 〈住吉の浜で斎行〉

浜辺に儀式的祭場が設けられ、宮主のほか大勢の貴族や官吏も参列する中で斎行されました。

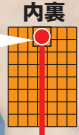




帰還後は天皇の御衣を返し、八十島祭の終了を報告します。



典侍



1 平安京



都大路を南に進み、鳥羽伏見を経て淀の津へ向かう一行を、多くの見物人が沿道から見送りました。



2 淀の津

おぐらいけ  
巨椋池

摂津国

山城国

木津川



一行は都への帰路に立ち寄り、船に乗り込んだ遊女に祝儀を配りました。



7 江口は現在の淀川と神崎川の分岐点あたりにあり、古くには遊里が栄えていました。

7 江口(帰路)

3 渡辺の津

三国川

中津川

6 生國魂神社

河内湖

4 熊野街道

難波宮 (P1に説明)

住吉の浜

5 住吉大社

上町台地

大和国



4 熊野街道

渡辺の津から熊野三山への参詣に利用された街道。一行はここから阿倍野道を通り、住吉の浜へ向かいました。



5 住吉大社 (大阪市住吉区)

祭場が住吉の浜に移されてから、生島・足島の神とあわせて海とのつながりが深い住吉の神々が祀られるようになりました。



6 生國魂神社 (大阪市天王寺区)

八十島祭では、神武天皇によって日本の国土の神霊とされた生島・足島の二神が祀られました。この祭神は今も生國魂神社に祀られています。

『八十島祭絵詞』第2巻  
＜住吉の浜での祭儀＞

住吉の浜辺に祭場が設けられ、典侍(右奥)が参列。百種の神饌が供えられた祭壇を前に宮主(白装束)がお祓いをした後、琴が奏でられる中、典侍が御衣を振り動かして海風を受け、「大八洲の霊」を衣にいただきました。

